

平成二十四年度

和歌山信愛女子短期大学附属高等学校

入学試験問題

# 国語

受験上の注意

- 一 問題用紙は1～20ページまでです。  
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を開いたまま裏返しておきなさい。

受験番号

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

複製がオリジナルの※まがいもので、価値的に劣る、というのは、絶対的です。A、それは複製という概念のなかに含まれていくことだからです。B、心の底ではaナットクしきれない声がつぶやいています。芸術は、実際にそれを楽しめるかどうかの問題ではないか。1この点では複製は立派に役に立っている、というのです。では、複製の体験がオリジナルの体験に劣るものなのかどうかを、bケントウしましょう。

一九六〇年前後のことだったと思います、次のような記事を雑誌で見たことがあります。

——あるホールで、舞台の上にオーケストラを配置し、舞台の両袖（たもと）にスピーカーを設置する。ベートーヴェンの交響曲を、最初はオーケストラが演奏する。途中で、録音された演奏をスピーカーから流すのだが、切り替え①られても、オーケストラの団員たちは音を出さずに演奏のふりをしつづける。このような切り替えを何度か行うが、客席においてこれを聴いているひとには、その切り替えを知覚できない。——これがイベントのcチヨウセン的な予告であったのか、それとも誰も聞き分けられなかった、という報告

だったのかは、記憶が定かではありませんが、きっと音響メーカーの自信を示す広告だったのだと思います。

当時、レコードを再生する音響装置はハイ・ファイと呼ばれていました。High Fidelityの略語で、この英語をそのまま訳した「高忠実度」という日本語もありました。この言葉は、オリジナルに対する高忠実度を意味していますから、レコードが複製であること、しかし限りなくオリジナルに近い複製であるという主張を表しています。このイベントは、その忠実度が、人間の耳には聞き分けられないレベルのものであるということを、誇示するものだった、と言えます。C、オリジナルと等価な複製です。事実、誰も聞き分けられなかったのだらうと思います。

ちなみに、音響技術の発達と軌を一にして、カラー印刷の技術も目覚ましい進歩を示してきました。絵画のカラー図版は、オリジナ

ルと並べて吟味される機会が多いだけに、不満の対象となることが少なく②ないでしょう。しかし、二〇世紀後半における改良のあとには驚くべきものがあります。平凡社が美術全集の刊行を始めたのは、一九五九年のことです。現在の目で見れば、相当に劣悪なものを含んでいます。それでも当時は多くの人びとを引きつけたもので、その後につづく美術全集ブームのさきがけとなりました。いま、それを劣悪と見る目そのものが、この間の技術の進歩の目覚ましきのdシヨウコです。オリジナルが単色の銅版画や石版画などですと、eテンランカイで売っている複製画は、2わざわざサイズを変えています。それほどの段階に現在の複製技術は達しているのです。

3ミケランジェロがシステイーナ礼拝堂の壁に描いた超大作の場合、私たちは、額縁に入ったその複製を見て、それが単なる複製である、という意識を消し去ることはできません。しかし版画に関しては、オリジナルと複製の違いはまったくない、と断言することができます。これは、音楽の場合ならば、大交響曲と、ピアノの独奏曲の違いに相当するかもしれません。ピアノの独奏ならば、レコードを再生するのと同じ居間でオリジナルを聴くことも可能です。しかし、現在のわれわれの意識では、このような比較に基づいて交響曲とピアノ独奏曲の録音の違いを考えることは皆無だと思えます。そして、コンサート・ホールで聴いたどの演奏にも増して、レコードの演奏から深い感銘を受け、曲の本質についての洞察を得た、というひともいるに相違ありません。そのような経験が、録音の「忠実度」によるものではない、ということ、見当がつきます。

小林秀雄の有名な評論に『モーツアルト』があります。あるとき、街を歩いていると、頭のなかでモーツアルトの交響曲が鳴り響いた。大急ぎでレコード店に飛び込み、この曲を聴いてみたが、初めの感銘は消えていた、という内容です。当時のレコードは、音が悪かったのだ、感銘がよみがえらなかつたのだ、と思われるかもしれませんが、しかし、初めの感銘はレコードの音響でさえなく、単なる記憶のなかでの出来事にすぎません。そして、かれの原体験はレコードであったと思われる。『モーツアルト』の構想の原点にあったのは、友人宅で聴いたレコードであったようです。そのときのことを、かれは次のように言っています。「聴覚的宇宙が実存するのをまざまざと見るように感じた」（『ゴッホの手紙』）。この言葉を額面どおりに受け取ってよいとすれば、かれは、貧弱な音のレコードから、4宇宙的な聴体験を得たこととなります。そして、それは、コンサート・ホールにおける「オリジナル」の鑑賞であったな

らよりよく得られるとか、必ず得られる、というような性格のものではないでしょう。都会ならば得がたかった体験かもしれません。その友人宅は伊豆半島の伊東にあったのです。

もとにあったのが生演奏でなく複製であったという理由で、小林の体験がまがいものであるとか芸術の体験でないとか言えるでしょうか。5 体験を問題にするかぎり、それは難しいのではないのでしょうか。これが芸術体験でない、と断定できる理由が見つかるなら、喜んで耳を傾けたいと思いますが、わたくしには見つかりません。一九世紀のドイツの美学者たちは、芸術作品を体験しているとき、意識のなかで起こっていることを指して、美的な意識と呼んでいました。つまり、芸術体験の実質そのものが美的意識です。心のなかで起こることが問題であるならば、体験の対象がオリジナルであるか、複製であるかは、重要ではないと言えます。たしかに、充実した体験はオリジナルから得られることが多いかもしれませんが、しかし、オリジナルの名演奏に何も感じないひとがいる一方で、貧弱な音のレコードを聴いて、深い体験を得るひとがいても不思議ではありません。また、このようなオリジナルとの比較による議論が意味をもたないほど、複製だけで芸術を楽しんでいるひと、少なくないことでしょう。

このことは、不思議な、あるいは悩ましい問題を提起します。書棚の小説は、読まれないかぎり、単なる物体です。壁にかかった絵画も、それを見つめ、いつときそこに没入することがなければ、芸術としての効果をもったとは言えません。6 芸術は体験において初めて芸術だと言えるのです。しかし、その体験の相においては、オリジナルが絶対的な価値をもっている、と行うことができないのです。ときには、複製の体験の方が、体験としては豊かだ、ということさえあるからです。レコードでなかったなら、小林秀雄が「聴覚的宇宙」という観念を得ることができたかどうか、はなはだ疑問です。コンサートとしてはありえないような特殊な時空間とともに、音の貧しさそのものが想像力を活性化したに相違ありません。オリジナルがなければ複製はありえませんが、どちらでも好きな方を選びとられて、複製の方を選ぶひとは例外的でしょう。それにもかかわらず、複製は、体験のうえでもこのような重要性を示しているのです。

経験や事実を照らして、複製の美的可能性は否定できません。美的可能性を否定できない以上、それを芸術でないとする理由は見当



たりません。むしろ、テクノロジーの時代になって可能になった芸術の新しい地平として認めるのが健全でしょう。そもそもわれわれの生活様式そのものが、テクノロジーによって大きく変化しています。7それは《もはや人間の生活ではない》のでしょうか。

(佐々木 健一『美学への招待』より)

注 ※ まがいもの…似せてつくったもの。にせもの。

問一 —— 線部 a と e のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 

A
---

 $\sim$ 

C
---

 に当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし      イ では      ウ つまり      エ さらに      オ なぜなら

問三 —— 線部①「られ」、②「ない」と同じ用法のものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①「られ」

ア 入院中の母のことが案じられ、病院に急いだ。

イ 先生から声をかけられて、生徒会役員に立候補した。

ウ 二時間ほど前に出かけられ、まだお戻りになりません。

エ 私はいまだにピーマンが食べられない。

②「なご」

ア 祖母に食べきれないほどのお菓子をもらった。

イ コンクール前にクラブをやめるとは穏やかでない話だ。

ウ 好き嫌いをしないで、なんでも食べなさい。

エ 彼が学校を休むなんて、考えられないことだ。

問四 ——— 線部1「この点」とは、どういう点ですか。本文中の言葉を使って十五字以内で答えなさい。

問五 ——— 線部2「わざわざサイズを変えています」とありますが、それはなぜですか。三十字以内で説明しなさい。

問六 ——— 線部3「ミケランジェロがシステイーナ礼拝堂の壁に描いた超大作のような場合、私たちは、額縁に入ったその複製を見て、それが単なる複製である、という意識を消し去ることはできない」とありますが、これを「大交響曲」の場合に置き換えて説明した次の文章の【X】【Y】【Z】に当てはまる言葉を、——— 線部3と同じ段落から抜き出して答えなさい。

【X】で聴くオーケストラによる大交響曲の【Y】の演奏は、コンサート・ホールで聴く【Z】の演奏であると思うことができない、ということ。

問七——線部4「宇宙的な聴体験を得た」とありますが、小林秀雄が「宇宙的な聴体験を得た」理由について、筆者はどのように考えていますか。それが書かれている一文を本文中から抜き出し、最初の十字を答えなさい。

問八——線部5「体験を問題にするかぎり、それは難しいのではないのでしょうか」とありますが、それはなぜですか。本文中の言葉を使って、五十字以内で答えなさい。

問九——線部6「芸術は体験において初めて芸術だと言えるのです」とありますが、ここでいう「体験」の具体例として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 実際に陶器作りを体験してみて、初めて陶芸という芸術のおもしろさに気づいた。
- イ 明日好きな歌手のコンサートに行けると考えただけで、興奮して夜も眠れなかった。
- ウ 本物の絵が持つ迫力というものは、画集を眺めているだけでは全く伝わってこなかった。
- エ 文化祭で演劇をして、体験しなければ得ることのできない感動があることを知った。
- オ 図書室で何気なく見ていた写真集の一枚に感動し、目が離せなくなってしまった。

問十 —— 線部7「それは《もはや人間の生活ではない》のでしょうか」とありますが、この言葉に込められた筆者の考えとし

て、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア テクノロジーが発達し、インターネットなどから多くの情報を得られるようになり、直接会えない人ともメールでやりとりできるようになった。人間は本来オリジナルなものからしか本当の「体験」は得られないので、その意味でオリジナルと接する機会を奪われてしまった現代人の生活は「人間の生活ではない」と言える。

イ テクノロジーが発達し、インターネットなどから多くの情報を得られるようになり、直接会えない人ともメールでやりとりできるようになった。このように、オリジナルのまがいもので、価値的に劣る「複製」ばかりに囲まれ、オリジナルにまったく接することのない現代人の生活は、「人間の生活ではない」と言うしかない。

ウ テクノロジーが発達し、インターネットなどから多くの情報を得られるようになり、直接会えない人ともメールでやりとりできるようになった。しかし、事件や事故の現場を直接訪れたり、人と直接会って話をしたりしないからこそ、逆に想像力が働き、充実した「体験」が得られるので、現代人の生活は「人間の生活ではない」とは言えない。

エ テクノロジーが発達し、インターネットなどから多くの情報を得られるようになり、直接会えない人ともメールでやりとりできるようになった。確かにこれらは「複製」ではあるが、「複製」からも充実した「体験」を得ることができる以上、オリジナルに接していないという理由だけで、現代人の生活が「人間の生活ではない」とは言えない。

オ テクノロジーが発達し、インターネットなどから多くの情報を得られるようになり、直接会えない人ともメールでやりとりできるようになった。確かにそのようにオリジナルと関わらない生活は、「人間の生活ではない」と言えるかもしれないが、テクノロジーの時代になって可能になった様々な恩恵を拒むことができない以上、受け入れていくしかない。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

うすい夕陽がこの私立病院の待合室にまださしこんでいる。長椅子で松葉杖をそばにおいた青年が恋人らしい女と腰かけている。ほかは誰もいない。

酒井はエレベーターに乗って妻の病室のある四階に昇った。1 ぶるいエレベーターには夕食の配膳車が残した沢庵のにおいがかすかに残り、鈍い軋んだ音をたてた。

病室をそつと覗くとベッドに妻がほそ腕を浴衣の袖からあげて髪をすいていた。同室の女性はどこに行ったのか、姿がみえぬ。昨日、頼まれたティッシュ・ペーパーの箱とオーデ・コロンの瓶などを彼はベッドの上に並べた。それから小さな花の鉢を窓ぎわにおいた。妻は黙ったままそれを見つめていた。窓の外はもう夕闇が忍びよって、向かい側の建物が灰色に見える。

「注射のあとのしこりが痛くって……。」

2 彼女は医者と看護婦への不平を長々とこぼしはじめた。そんな不平はこの一か月、酒井が会社の帰りに病院に寄るたび、日課のように聞かされたものだった。

「病院も忙しいからね、ほかに病人は何人もいることだし……。」

「この医者と同じね、あなたも。3 あなたは本当は冷たい人なんだから。」

「何でも悪くするのはよしなさい。そんな考え方をすれば暗くなる一方じゃないか。」

酒井は疲れを感じた。彼は妻のこんな性格も季節の変わり目に起きる喘息も、何が原因かを知っていた。喘息の発作を起こすようになったのは美津子が小学校の帰り、交通事故で死んでからである。雨の日で小さな傘をさしていたので向こうから疾走してきた小型トラックが見えなかったのだ。それは梅雨のむしむしする昼さがりだった。まだその日のことは、みんな憶えている。頭から離れない。

「隣の部屋に高校生の女の子が入ったの。」

4 やがて思いなおしたように妻は、

「今日、廊下で少し話したわ。十七歳だって言っていたから……美津子が生きていたら、今、同じ年の高校生ね。」

「なんの病気だね。」

「バレーボールをして転んで腕の骨、折ったんですって。」

窓を夕闇が浸しはじめた。同じ病室にいる中年の女性が戻ってきた。酒井は彼女に挨拶をして椅子から立ちあがった。

暗い灯のともっている廊下に出ると、ラジオの軽音楽がかすかに聞こえた。ひよつとすると妻が話をしていた高校生の女の子が聞いているのかもしれない。

家に戻ると一人で洋服をぬぎ、一人で着物に着替えた。妻が退院するまで来てくれる家政婦の用意した夕食は毎日、卓袱台に蠅よけをかぶせて置いてある。テレビをつけ、水割りを飲みながら野球の中継を見た。そして、5交代を命じられた投手のうつむいた後ろ姿から自分の停年の日を連想した。停年はもう間近だった。

テレビを見終わったあと、彼は茶の間の隅に家政婦がおき忘れた芸能週刊誌を a 所在なく開いた。

五十四歳の彼には縁の遠い芸能人たちのゴシップにぼんやりと目を走らせながら、死んだ娘がもし生きていたならば、こんな記事で面白がったろうかとふと、考えた。勉強が嫌いで流行歌ばかりに熱中していた子である。はしやぎ屋なくせにやさしい性格で父親の気持ちをよく察してくれ、決して悪い少女じゃなかった。

もし生きていて、高校生だったら、自分と、どんな話をしたろう。どんな甘えかたをしただろう。

「水泳の好きな女の子です。この夏休み、あつい浜で体を焼き、存分に泳ぐことを今から楽しみにしています。同年輩の高校生のお便り、お待ちしています。」

それは読者サロンと題した欄で読者がたがいにペン・フレンドを求めあうページだった。

「相沢利恵、十七歳、高校生、熊本県宇土市寺町」と書いたその名前から彼は陽に真っ黒に焼け、笑うと歯の真っ白な女の子を空想した。

娘が今いるならば同じように十七歳である。ひよつとすると彼女も夏休み、黒い顔に白い歯をみせる娘に成長していたかもしれない。酒井は美津子がまだ小さかったとき、潮干狩りや千葉の海岸に泳ぎにつれて行ってやった日のことを思いだした。抱いて海に入っていくと、波をこわがって、しがみついていた小さな腕や乳くさいような柔らかな頬の感触が痛いほどよみがえってきた。

ながい間、彼はぼんやりと、その読者サロンを見つめていた。と、ある考えが心にゆっくりと浮かんだ。彼はそんな考えを持ったことが、ひどく照れくさく、恥ずかしかったが、ひよつとするとこの娘が6自分の願いを聞いてくれるかもしれないという淡い期待があった。

「私は五十四歳になる年寄りですが。」

酒井は自分が書くであろう手紙の文字を思い浮かべた。

「妻は四十九歳です。ずっと昔に一人娘を事故で亡くしました。その後、子供がほしかったのですが私たちの間にはできなかったので。娘が生きていれば、今、あなたと同じ年齢の高校生のはずです。あなたと同じように、夏休みを海やプールで泳ぎまわっている健康な子供に成長していたかもしれません。今日、何気なく週刊誌であなたの便りを見ると、娘のことが思いだされてなりません。時々私と妻にお手紙を書いてはくださらないでしょうか。学校のことでも、友だちのことでも何でもけっこうです。娘のかわりに手紙がほしいなどと言えば変な年寄りだと思いでしょすが、お父さんやお母さんに話して頂ければ、一人娘を失った親の気持ちはわかってくださると思います。決して御迷惑はかけません……。」

彼は手紙の文字を頭のなかに一字、一字、浮かべながら思わず苦笑した。いい年をして何ということを考えるのだろう。もしその娘が手紙を受けとったなら、それだけで薄気味わるく思うにちがいはなかった。あるいは馬鹿にしたように笑って親や友だちに見せまわった揚げ句、紙屑籠に捨てるにちがいはなかった。

だが――。

だが結局、彼は手紙を出してしまった。自分でもなぜ、そんなことをしたのか、わからない。会社から妻の愚痴を聞くために病院に寄り、病院から、一人住まいの家に戻るわびしさが、そうさせたのかもしれない。あるいは妻の暗い表情を見るたびに、こみあげてくる悲しみがそうさせたのかもしれない。五十四歳という人生の秋に近い年齢が、かえって彼を□□にさせたのかもしれない。

郵便ポストに手紙を入れたとき、遠い底でコトとかすかな音がした。7この音は妻と二人っきりの長い平凡な生活を初めて破つた音だった。

妻には何も言わなかった。だがそのくせ、毎日、病院から家に戻るとき、酒井は歳とせに似あわぬ胸のときめきを――死んだ娘が家で待っているような期待さえ持ったのである。

返事は来なかった。郵便箱には彼の年齢にふさわしいパンフレットや広告や封書が放りこまれてあるだけだった。あの手紙はおそらく、どこかで読まれ、どこかで破られ、どこかに捨てられたにちがいなかった。

ある夕方、夕立がふった。病院で彼はその雨がやむのを待ったために、いつもより長く妻の愚痴とつき合わねばならなかった。

夕立が通過し、病院前の濡れた坂道をおりていくと、そこから灯のうるんだビルや家々が見おろせた。ひとつひとつの窓に自分と同じような生活がある。なんの取り柄えらもなく、平凡そのものだった五十四年間の自分の人生を酒井は諦あきらめをもって考えた。

家に戻り、何気なく郵便箱に手を入れると、ヒヨコの絵を印刷した封筒が出てきた。横書きの稚拙な字で彼の住所と名前とが書かれ、裏には熊本県宇土市寺町という住所と相沢利恵という名前とが小さく、恥ずかしそうに並んでいた。

靴もぬがず、玄関に腰をおろしたまま、彼はその封筒を切った。

「おじさん。びっくりしました。まさか、おじさんのような人から返事がくるとは夢にも考えなかつたんです。でも読んでいるうち、おじさんの気持ちがじんときて、よくわかったです。親ってありがたいなあ、と考えてしまいました。もし私が死んだら、私の父母もおなじようにいつまでも子供のことを考えるのかしら。しかし私はまだまだ死にそうもありません。親から笑われるほど丈夫なんです。



水泳だって男の子に負けません。でも勉強はあまり好かんとです。数学も苦手です。数学がこの世になかったら、どんなに幸福か、と思っています。」

酒井は肉の少しこけた頬に微笑を浮かべながら何度もその手紙を読みかえした。着物に着替え、家政婦がつくった夕食を食べながら、一杯の水割りの氷の音をコロ、コロといわせて味わいながら、この手紙をまた読みかえした。ほのぼのとした温かい気持ちが胸に広がった。五十四歳の年寄りの頼みを聞いてくれた十七歳の女の子の優しい気持ちが嬉しかったのだ。

その夜、彼は卓袱台に便箋をおき、この間と同じように万年筆を走らせた。静かな夜で遠くで時折電車の音が聞こえるだけだった。相沢利恵に返事をしたためながら彼は死んだ娘に話しかけているような気がした。

「健康。健康。何より健康。だから数学がちよつとぐらい出来なくても良いとおじさんは思います。」

寢床についてから酒井は幸せな、落ちついた気持ちを味わうことができた。書きおえた封筒を枕元において明日、忘れずに投函しようと思った。

(遠藤 周作『嘘』より)

問一 —— 線部 a 「所在なく」、b 「苦笑した」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 居場所がなくて寂しい様子

ア 複雑な気持ちで笑った

イ 気が利いて抜かりがない様子

イ ばかにして笑った

a 「所在ない」

b 「苦笑した」

ウ することがなくて退屈な様子

ウ つかすかにほほえんだ

エ わけもなくいらだっている様子

エ つらくて笑ってしまった

オ あきらめたような投げやりな様子

オ 耐えきれず笑ってしまった

問二——線部1「ふるいエレベーターには夕食の配膳車が残した沢庵のにおいがかすかに残り、鈍い軋んだ音をたてた」とありますが、この部分から読み取ることで「酒井」の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 妻の病状が悪化していないか心配している。

イ 頼まれていた買い物を早く渡したいと気が急いでいる。

ウ 妻の病室を訪れることに気の重さを感じている。

エ 妻と面会できることを嬉しく思っている。

オ 古びた病院の施設にいらだちを感じている。

問三——線部2「彼女は医者と看護婦への不平を長々とこぼしはじめた」とありますが、「彼女」がこのようになってしまった原因を、「酒井」は何だと考えていますか。本文中の言葉を使って答えなさい。

問四——線部3「あなたは本当は冷たい人なんだから」とありますが、なぜ「妻」はこのように感じたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 夫はいつも自分の顔をうかがって言動を選んでおり、よそよそしい感じがするから。

イ 夫は自分には一向に関心を持ってくれず、死んだ娘のことで上の空になってしまっているから。

ウ 夫は身の回りの物など頼んだ物は持って来てくれるが、たまにしか見舞いに来てくれないから。

エ 夫は頻繁に病室を訪れてはくれるが、自分のつらさを理解しようとせず、いたわってはくれないから。  
オ 夫は病院の医者や看護婦の忙しさには理解を示すのに、自分の訴えは聞き流すだけで返事もしてくれないから。

問五 —— 線部4「やがて思いなおしたように」という表現から、「妻」が一度はどのような気持ちになったことがうかがえます

か。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 死んだ娘を思い出すので、「高校生の女の子」の話をしてよいものかと、ためらう気持ち。
- イ 一度は言わないでおこうと決めたはずだが、やはり夫に聞いてもらいたいと、切実に願う気持ち。
- ウ 冷たい夫に対して、病院の話をしてもらえないのではないかと、不安に思う気持ち。
- エ 腕の骨折なら怪我が治れば退院できるが、自分の娘はもう戻らないと、悲しむ気持ち。
- オ 同じ病室にいる中年の女性が戻ってくる前に話しておきたいと、焦る気持ち。

問六 —— 線部5「交代を命じられた投手のうつむいた後ろ姿」とありますが、ここから「酒井」は自分のどのような姿を連想したのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 停年まで精一杯仕事をやり抜いた自分に誇りを持って会社を後にする姿。
- イ 仕事ばかりで家庭を顧みなかったことを反省しながら会社を後にする姿。
- ウ 長年打ち込んできた仕事と別れねばならない寂しさを胸に会社を後にする姿。
- エ わずらわしい会社勤めから解放され、のびのびした気持ちで会社を後にする姿。
- オ 最後までやり遂げたという充実感もなく、中途半端な気持ちで会社を後にする姿。

問七 —— 線部6「自分の願い」とありますが、どのような願いですか。その内容にあたる部分を、本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問八  に当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 冷静      イ 大胆      ウ 臆病  
エ 敏感      オ 慎重

問九 —— 線部7「この音は妻と二人っきりの長い平凡な生活を初めて破った音だった」とありますが、この表現から「酒井」のどのような気持ちが変わりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 妻と二人っきりの長い平凡な生活の中で、久しぶりに手紙を書いた興奮から、相沢利恵はきつと返事を書いてくれるにちがいないと確信する気持ち。

イ 相沢利恵もきつと、娘のように流行歌の好きなやさしい性格の女の子だろうと想像し、妻も彼女との文通には賛成してくれるだろうとときめく気持ち。

ウ 自分が出した手紙は紙屑籠に捨てられるにちがいないと思いつつも、今のわびしい現実から抜け出すきっかけになるかもしれないと期待する気持ち。

エ 妻も自分と同じように、娘のことは早く忘れてしまおうと努力していたので、相沢利恵に手紙を出すことは妻を裏切ってしまうことになるかと後ろめたさを感じる気持ち。

オ 手紙が郵便ポストの中に落ちるかすかな音が、相沢利恵からの返事が来ないことを予感させるようで、自分のほのかな期待が裏切られるかもしれないと不安に思う気持ち。

問十 本文における表現の特徴についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 会話の繰り返しによって、主人公の心情がわかりやすく伝わってくる。
- イ 情景描写を織り交ぜながら、主人公の心情の変化を細やかに描き出している。
- ウ 一人称を用いることによって、主人公の感情が印象的に描き出されている。
- エ 人の死という重いテーマを、ゆ比喩や倒置法を用いてユーモラスに表現している。
- オ 複数の視点からの心理描写によって、登場人物の内面が生き生きと描かれている。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

けしからず、※物事にアいはふ亭主ありて、与三郎といふ※中間に、※おほつごもりの晩、aいひをしへけるは、「今宵は常よりとく宿に帰り休み、明日は早々起きて来たり門をたたけ。内より『誰そや』と問ふとき、『福の神にてさぶらふ』と答へよ。①すなはち戸を開けて1呼び入れむ」と②ねんごろにいひふくめて後、亭主は心にかけて、鶏の鳴くとイ同じやうに起きて門にウ待ちめけり。案のごとく戸をbたたく。「誰そ、誰そ」と問ふ。「我は、と答ふる。無興ながら門を開けて、※そこもと火をcともし、※若水を汲み、※羹を据うれども、亭主顔のさま悪しくて、さらにもdいはず。中間不審に思ひ、つくづく思索しゐて、宵にしへし福の神をうち忘れ、やうやう酒を飲むころに思ひ出だし、2仰天し、膳をあげ、座敷を立ちざまに、「※さらば福の神にてさぶらふ。おいとま申す」といひけり。3亭主、ますますさま悪しくなりにけり。

( ) 『醒醉笑』より( )

注 ※物事にいはふ…何かにつけて縁起をかつぐ。

※ 中間…使用人。

※ おほつごもり…大みそか。

※ そこもと…そこらへん。

※ 若水…新年に初めて汲む水。邪気を払うとされる。

※ 羹…(こ)では雑煮のこと。

※ やびば…やい。

問一 ———— 線部ア～ウをそれぞれ現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えなさい。

問二 ———— 線部 a～d のうち、主語が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。また、その主語は誰かも答えなさい。

問三——線部①「すなはち」、②「ねんごろに」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 急に

ア すばやく

①「すなはち」 イ おもむろに

②「ねんごろに」 イ 簡単に

ウ すぐに

ウ 厳しく

エ とりあえず

エ 丁寧に

問四——線部1「呼び入れむ」を現代語訳しなさい。

問五 に入る適当な三字を本文中から抜き出して答えなさい。

問六——線部2「仰天し」とありますが、これは何を思い出して「仰天し」たのですか。答えなさい。

問七——線部3「亭主、ますますさま悪しくなりにけり」とありますが、「亭主」の機嫌が悪くなったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 亭主の言いつけを守らず、亭主のことをからかって出て行こうとしたから。

イ 亭主が正月用にわざわざ用意した酒を飲まずに、さっさと出て行こうとしたから。

ウ 亭主の言いつけをまったく気にせず、偉ぶった態度をとって出て行こうとしたから。

エ 亭主の言葉の意図を正しく理解できず、不適切な発言をして出て行こうとしたから。

オ 亭主の言いつけを忘れていたのに、適当に謝罪しただけで出て行こうとしたから。

受験番号

問一

d	a
e	b
	c

問二

A

B

C

問三

①

②

問四

問五

問六

X

Y

Z

問七

問八


問九

問十

問一

a

b

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問一

ア

イ

ウ

問二

主語

問三

①

②

問四

問五

問六

問七



問一		a	納得
d	証拠	b	検討
e	展覧会	c	挑戦

問二	A	オ	B	ア	C	ウ	問三	①	イ	②	イ
----	---	---	---	---	---	---	----	---	---	---	---

問四	実	際	に	芸	術	を	楽	し	め	る	と	い	う	点	。
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問五	な	複	く	製	な	技	っ	術	た	が	進	ら	歩	。	、	オ	リ	ジ	ナ	ル	と	区	別	が	っ	か
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問六	X	居間	Y	レコード	Z	オリジナル
----	---	----	---	------	---	-------

問七	コ	ン	サ	ー	ト	と	し	て	は	あ
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問八	、	対	心	重	象	の	要	が	な	か	で	は	リ	で	起	こ	い	ナ	ル	こ	ら	で	こ	と	が	問	題	で	あ	り	、	体	験	の
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問九	オ	問十	エ
----	---	----	---

問一	a	ウ	b	ア	問二	ウ
----	---	---	---	---	----	---

問三 娘の美津子が小学校の帰りに交通事故で死んでしまったこと。

問四	エ	問五	ア	問六	オ
----	---	----	---	----	---

問七	娘	の	か	わ	り	に	手	紙	が	ほ	し	い		
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	--

問八	イ	問九	ウ	問十	イ
----	---	----	---	----	---

問一	ア	いわう	イ	おなじように	ウ	まちいけり
----	---	-----	---	--------	---	-------

問二	b	主語	与三郎(中間)	完答	問三	①	ウ	②	エ
----	---	----	---------	----	----	---	---	---	---

問四	呼び入れよう	問五	与三郎
----	--------	----	-----

問六 亭主に福の神だと名乗って入ってくるように言われていたこと。

問七	エ
----	---

--